

平成29年度第1回光市総合教育会議 会議録

1 開催日時

平成29年8月24日（木）午後1時30分～午後2時50分

2 開催場所

光市教育委員会1階ホール

3 出席者

(1) 構成員

光市長 市川 熙

光市教育委員会 教育長 能美 龍文

〃 教育委員 永岡 榮之

〃 教育委員 河村 博明

〃 教育委員 寺崎 益朗

〃 教育委員 中西 かおり

(2) 説明員

光市中学校長会 会長 伊藤 幸子（浅江中学校校長）

光市小学校長会 会長 酒井 宏高（浅江小学校校長）

(3) 関係者

ア 市民部地域づくり推進課

縄田地域づくり推進課長

イ 福祉保健部子ども家庭課

西村子ども家庭課長

ウ 教育委員会事務局

蔵下教育部長、太田教育総務課長、和田学校教育課長、奥屋学校教育課主幹、弘文化・社会教育課長兼人権教育課長、村崎体育課長、穂山図書館長、清水学校給食センター所長、影土井教育総務課経理係長、村上教育開発研究所主任研究員、永光教育企画担当（学校教育課）

4 傍聴者

8名

5 次 第

開 会

(1) 市長あいさつ

(2) 議 事

ア 「連携と協働で育む 光の教育」に向けた現状と取組みについて

イ その他

閉 会

6 議事録（要旨）

開 会

(1) 市長あいさつ

本日の会議で5回目となるが、皆様より様々なご意見をいただき光市教育大綱を策定されたことについて、改めてお礼を申し上げたい。

今後は大綱に基づき、子どもたちの教育を進めていくことになるが、本日の会議には、浅江中学校の伊藤校長先生、浅江小学校の酒井校長先生にご出席をいただいている。学校現場で「連携・協働」をどのように展開するかという課題について、ぜひご意見をいただきたい。

「連携・協働」を考えると、幼保・小・中・高の連携は当然であるが、加えて家庭や地域との連携が重要であると考えている。今、全国的に「PTAが本当に必要か。」という議論がある。「PTAとの連携」を「家庭との連携」に置き換えて考えた時、これは絶対に必要であると考えている。では、どうすれば家庭及びPTAが連携を図っていけるかについては、更なる議論が必要である。地域社会との連携、これは光市が得意とする分野であり、引き続き実施していかなければならない。

こうした視点を踏まえ、昨日行われた「教育フォーラム in ひかり」を楽しく拝見させていただいた。小・中学校の英語教育の発表にもさまざまな工夫があり、生き活きと活動している姿はとても頼もしく感じた。

本日の会議には、傍聴に光高校の先生にもお越しいただいているが、教育フォーラムも是非とも見ていただければ良かったと感じている。現在、小・中学校の連携はうまく進んでいるが、幼保・小・中・高における一連の連携がこれから目指すべき方向と考えているので、高校ともしっかりと連携できることを証明していきたいと考えている。

本日は光市教育の将来に向け、皆様方から率直なご意見とご提言をお願いしたい。

(2) 議 事

ア 「連携と協働で育む 光の教育」に向けた現状と取組み

(説明員)

資料に基づき、酒井校長先生、伊藤校長先生より説明。

【質疑・意見等】

(構成員)

校長先生から連携、協働に関するご説明をいただき、コミュニティ・スクールの必要性、すばらしさを改めて感じた。物事の進化には様々な方向があるが、良い方向に進んでいると思う。一方で、教職員の負担軽減に向けた取組みなど、多くの課題もあると再認識した。

小学校、中学校、高校と進級、進学及び進化していくことを、ボーイスカウトではエデュケーショナル・トレイルと呼んでいる。それぞれの年代に応じた目標を設定し、そうした目標をクリアするごとにレベルアップしていく。そして高校生までの成長をしっかりと見守っていくことが私たち大人の役割である。子どもたちにとって、成長した高校生たちを間近に目標として見ることのできる地域を築いていければと思っている。

今後とも、公立高校や私立高校と連携しながら地域の中で子どもたちが成長できる、そうした社会の発展について、教育を通して目指していきたいと考えている。

(構成員)

光市のPTA活動はとても元気があると感じている。保護者の方々が学校の活動すべてに参加することは困難であるが、学校の取組みについては理解と協力をいただいている。

本市では、こうした教育環境のもとで、中学校区を基盤とした連携の仕組みを目指している。それぞれの地域には高校生がいる。進学する高校は違っても、就学前児童から高校生までをしっかりとつなげていく必要があり、義務教育9年間で基本に、私たちが理想とする高校生の姿を見ることができるとしている。中学生の活動の主旨は地域貢献だが、高校生はもう一步踏み込み、直接、地域づくりを担う人材であると考えている。

(説明員)

中学生は「15歳は地域の担い手」として、あらゆる場所で地域活動をしているが、それは社会参画しようとする意識を高めるところまでで、具体的な地域づくりにまでは到達していないが、高校生になると実際に地域づくりを担うケースも出てくると思う。そうした高校生の姿に直接接触し、憧れを抱くことも、中学生にとっては非常に重要なキャリア教育の一つと考えている。

(構成員)

光市には高校生と小学生が交流できる場があり、例えば、高校生であるジュニアリーダーが小学生主体の教育キャンプ等に参加し、しっかりとリードしている。そうしたジュニアリーダーを企画員の皆さんで育て、そこで育った高校生が取組みのリーダー格として活躍している。こうした高校生が市民夏期大学等の司会進行を務めるなど、さまざまな場面で活躍する姿を目の当たりにする機会が増えてきた。今後もさまざまな地域活動の中で活躍の姿が見えてくれば、さらに地域とのつながりも深まると思う。

(構成員)

幼いときは集団の中で遊び、高校生の年代になると、一人でいろいろと考えることで能力が高まっていく。高校生が地域の中に入ることは難しい一面もあるが、高校のクラブ活動などに地域貢献活動がもっとあっても良いのではないかと。そうすれば、更に地域とのつながりの方向性が見えてくるのではないかと。

(構成員)

「15歳は地域の担い手」ということで、多くの小学生や中学生が地域ボランティア、地域活動に貢献している。こうした活動の成果を子どもたち自身が認識できるよう情報発信を工夫し、伝えていくことが必要ではないかと思う。

(説明員)

小学生は「地域貢献」というよりも「地域を元気にする」ということで、例えば虹ヶ浜の掃除やこも巻き等を地域の方々と一緒に行う中で、お褒めの言葉等をいただいている。また、活動の様子をwebページや学校だよりに掲載するなど、保護者や地域の方にも積極的にお知らせしている。子どもたちは地域の方々に褒めていただけることで大変喜んでいるし、学年が上がるにつれ、さらにつながりが深まっていくものと考えている。

(構成員)

いろいろな活動を通じて子どもたちの成長を実感できることは、とても素晴らしいと思う。

(説明員)

浅江中学校では、例えば、コミュニティ・スクールの組織に生徒会を組み込み、会議にも生徒が出席している。年4回の会議で3カ月間の取組みを共に振り返り、活動の評価をしている。

(構成員)

その会議には、何名の生徒が参加されているか。

(説明員)

15名程度である。

(構成員)

年間を通して出席されているのか。

(説明員)

生徒会の役員が年間を通して出席している。

(構成員)

リーダーシップを養成するためにも非常に良いことだと思う。

(構成員)

数年前にコミュニティ・スクールの先進地視察で出雲市を訪問し、これから光市にも導入していくという時期であったが、あれから7年余りが経過し、今では光市のコミュニティ・スクールは山口県のリーダー、日本のリーダー的な存在となり、素晴らしいことと思う。

コミュニティ・スクールに関する県の大会で、「生徒が中心の論点から、コミュニティ・スクールはあるべき」という言葉が印象に残っている。子どもたちの社会貢献は、そうした観点からどのようにあるべきか、子どもたちには社会に役立つということでもとても良いことであるが、それだけでは本末転倒になってしまわないかという疑問もある。また、「光市が子育てをもっと応援する市であってほしい。そのためにはスピード感を持って子どもたちが快適に学べる環境を整えてほしい。」との説明には同感できる。

(構成員)

市としての方向性をしっかりと定めたいと実施していきたいと思っている。子どもたちの学習環境の整備は非常に重要と考えている。

(構成員)

子どもたちが地域に対し、どのような貢献ができると思われるか。

(説明員)

コミュニティ・スクールは、子どもを育むための取り組みである。子どもを育むことについて考えるとき、地域に貢献することは単なる地域の御用聞きではない。子どもの成長過程において、子どもたちが地域の中で有用な役割や仕事を与えられているかどうかが重要であると考えている。困って外からお世話や手伝いをしてもらっただけが子どもを育てることではなく、子どもたちがたくましく生きていくための力を育てる活動として取り組んでいく必要がある。

(構成員)

地域貢献をすることが目的ではなく、地域貢献を通じてどのような資質をどのように見つけられるかが、より良い市民となり、良い社会をつくっていく原動力になると思う。これが子どもたちの本来の地域貢献の目的と考えている。

(構成員)

先日、「地域で育った子どもたちが大学進学や就職などで都会に出て行く。合せて、人口だけではなく、お金や資産も首都圏に流れていく。その結果、地方の銀行は苦戦し、ますます地方が疲弊していく。」といった話を耳にした。その時、コミュニティ・スクールの件が頭に浮かんだ。今日の話聞きながら、コミュニティ・スクールを力強く進めていくこと

は、地域の大人を巻き込みながら、子どもたちに地域についてしっかりと伝え、この地域をより良くしたいという気持ちをつなげていくことがとても大切なことだと感じた。

最近、多くの経営者が「経営の悩みの一つに人材不足がある。」と言われる。例えば、地元企業の就職面接の際、企業の長所について知ってもらっても、「もっと良い会社がある。もっと大手の企業がある。」と家族に反対されるケースがあるそうだ。学校教育においても、大人を巻き込み、地域の良さをしっかりと発信していく、そして地域を知る、地域の会社を知る、子どもについても知る、親も知ることが大切なことだと思う。将来に渡り、地域について考えていける市民であり続ける子どもたちを育てていくことが、地域の人材不足を防ぐ一つの大きな取組みではないかと考えている。先ほどの説明で小中連携を突き詰めていくと、必然的に小中一貫の流れになると言われた。まさにそのとおりだと思うし、そこから小・中学生と高校生、大人までを巻き込んだコミュニティ・スクールの成果等について発信していただきたい。こうした取組みが地域の人口流出に歯止めをかけるきっかけになると思う。

(構成員)

キャリア教育についていえば、例えば「雇用の日」の取組みもある。中学校2年生を対象に「光市にはこうした素晴らしい会社がある。」「こういう人の話も聞いてほしい。」ということを考えながら事業を実施している。最初に実施したときは、多くの高校生に参加していただいた。キャリア教育こそ、地域の連携が必要ではないかと考えている。

(構成員)

あさなえJネットでは「地域の方と学び合う授業」に力を入れ、美術や技術、英語の授業などで地域の支援をいただいているという話があったが、具体的にどのような取組みをされているか。

(説明員)

浅江中学校では、英語の授業と技術科の木工の授業、家庭科の調理実習、美術の授業等で地域の方々に入ってもらっている。英語については、週に一回、月に三回程度、ALTに地域の方々を対象に英会話の授業をしていただいている。そのうち15名程度は3年間英会話の勉強を継続されており、こうした方々に英語の授業に入っていただくようお願いしている。

(構成員)

すでに充実した取組みが展開されており、素晴らしいことだと思う。

(説明員)

平成27年に開催された世界スカウトジャンボリーで海外の青少年をお迎えする際、英語で浅江地域の良さを伝えることを目標に、1年前から地域の方を対象に英会話の授業をスタートした。世界スカウトジャンボリーが終わっても継続の要望があり、引き続き行っている。学校のコミュニティルームで共に学び、その方々が授業にも参加されている。

(構成員)

今後の課題として「教職員の業務改善とコミュニティ・スクールの取組み」とあるが、少し説明をお願いしたい。

(説明員)

昨年度より、教職員の全体の業務量を減らすための努力を継続している。各種の会議についても、出席が必要かどうかを検証することから始めている。

(構成員)

コミュニティ・スクールに関する会議や業務について検証されているのか。

(説明員)

学校の全体的な業務についてである。業務自体がビルド&ビルドで積み上がってきているので、その業務が真に必要なかどうかという観点から考えるようにしている。

その中で、コミュニティ・スクールに関してはどうしても会議が多く、例えば浅江小学校では、コミュニティ・スクールに関する年間4回の会議のうち、3回までの会議が4層構造になっている。教職員はこれまで一番最初の校内部会から保護者部会、企画委員会、最後に学校運営協議会に出席していた。今年は、1回目と3回目のみ教職員が出席するなど、コミュニティ・スクールに係る業務量で言えば、ほぼ2/3から半分程度に減らしている。

また、企画委員会には、高校の教職員にも委員として入っていただいている。高校には、英会話部や美術部等があり、「小学生に何か支援できないか。」という依頼をいただき、英語で絵本の読み聞かせや工作を手伝ってもらうなど、現在の活動につながっている。

(構成員)

保護者の反応はどうか。

(説明員)

浅江中学校のコミュニティ・スクールに関する会議は3部会制だが、浅江小学校は、それぞれ生活力部会と健康力部会、学ぶ力部会、安全力部会の4部会制である。本校の校務分掌もPTAの組織もこの4つに分かれている。この4層構造のうちCS保護者部会では、教職員とPTAと一緒に協議するが、かなりの人数の保護者がCS保護者部会に参加いただいている。テーブルを囲みながらいろいろな意見交換をしており、保護者の中でもコミュニティ・スクールの取組み内容や意義については充分浸透していると考えている。

(構成員)

会議の冒頭にPTAの是非が議論されていることに触れたが、今の話では多くの保護者が出席され、感心している。中学校も同様の傾向であるか。

(説明員)

中学校は、生徒会をコミュニティ・スクールの組織に組み込むと同時に、PTAの組織も組み込んでいる。コミュニティ・スクールの会議で協議し決定した内容をPTAの会議に持ち帰り協議するなど、PTA活動と連携できる仕組みとしている。

(構成員)

こうした内容を全国に向けて発信できると良いと思う。

(構成員)

今年の夏休み期間には多くの視察にお越しいただいている。先日も兵庫教育大学から視察に来られ、案内させていただいた。中学校では、コミュニティ・スクールの取組みを子どもたちがすべて説明し、大学院生の突然の質問にも、地域貢献の視点から堂々と答えていた。正直、これには驚かされた。子どもたちは計画的に場を与えれば、いくらでも対応できるし、成長できると改めて感じたところである。

(構成員)

今日は、「連携・協働」という切り口から皆様方に様々なご意見やご提言をいただいた。光市の教育は「連携・協働」の視点で進めている。これからはしっかりと取組む必要性を確認出来たとともに、また新たな課題も見えてきた。今後も、取組みの充実に向け、歩みを進めたいと考えている。今日は、浅江中学校と浅江小学校の校長先生をお招きしたが、他の学校ともこうした機会があれば是非いろいろな視点からお話を聞いてみたい。

イ その他

その他の事項等なし

午後2時50分終了